

査読論文

実習前評価システムに関する一つの考察 X

杉本大輔・櫻井美帆子・上原正希

要約

本稿では、本学社会福祉学科が毎年実施している実習前評価システム OSCE の 2025 年度の実施結果と、その分析、及び分析結果から導き出された本学社会福祉学科 2 年次におけるソーシャルワーク演習における教育課題、及び 3 年次以降の現場実習における新たな学習課題、及び実習に赴くにあたっての、克服すべき課題、さらに、昨年度より日本ソーシャルワーク教育学校連盟北海道ブロックにおいて検討されている、実習教育の新たな要因に関する本学の課題について考察する。

1. はじめに

日本ソーシャルワーク教育学校連盟北海道ブロック学校連盟における実習前評価システムに実施状況については、当該団体が日本社会福祉士養成校協会北海道ブロックであった 2009 年より参加校各々の事情により実施方法が異なっていたが、毎年 11 月に開催される当該ブロックセミナーで実施報告がなされていた。実習前評価システムの本来の意義、すなわち、実習生選抜のための試験、として実施している養成校などから、その実施報告が研究論文として発表されてきたが、本学のように、2 年次に実施し、実習前の学習課題の発見を目的とするものとは異なる。本稿では、本学社会福祉学科が毎年実施している実習前評価システム OSCE の 2025 年度の実施結果と分析及び、そこから導き出される学習課題について検証する。当該システムを本学が実施して 10 年になるが、2020 年までの旧カリキュラムと 2021 年から実施された現行のカリキュラムでは、本学 2 年次のソーシャルワーク実習指導 I（旧カリ名：相談援助実習指導 I）とソーシャルワーク演習（専門）I II（旧カリ名：相談援助演習 I II）で

は、前期半年分の科目が減少している。一つの科目を通年で学習することと、半期で終わることについては、その学習機能、特に学生の科目に対するモチベーションに何らかの影響を及ぼしているのではないか、という仮説が昨年の実施分析により抽出された¹。現行カリキュラムにおいて、この機能を補うために、本学では、今年度 2 年次より『福祉士試験対策基礎講座』という科目を設定し、ソーシャルワーク（社会福祉士、精神保健福祉士）資格取得についての、特に国家試験についてのモチベーションと関心を鼓舞することを目的とした科目を設定しているが、国家試験科目の学習についてのモチベーションを高めることに寄与することになるかもしれないが、実習教育との関連でいえば、この科目の順機能は十全とはいいがたい。本学全体のカリキュラムでいえば、さらに、学科をまたいだサブメジャープログラムが実施されており、地域へのボランティア活動などを通して、地域資源の発見、創造についての必要性を学習する機会も設けているが、学科をまたいでいるだけに、ソーシャルワーク実習教育に特化しているとはいいがたい。ソーシャルワーク実習教育は事前・事中・事後の学習が有機的に連関

することにより、学生一人一人の実習目的達成度と学習成果に十全な順機能を発揮する。実習を翌年に控えた2年次に、OSCEを実施し、面接の基本的技法における学生個人が得意・不得意な技法を自覚し、また、学年全体の傾向を量的に分析し、その結果を毎年蓄積し、翌年の学習に参照させることは、これらのカリキュラムの死角を補い、さらには、科目の学習内容を科学的に検証することにより、社会福祉学全体の学術的な進展にもつながるものと考ええる。

2, 2025年度星槎道都大学社会福祉学科実習前評価システム OSCE 実施要領

本年7月4日(金)の「ソーシャルワーク演習(専門)I」において、本年度の実習前評価システム

OSCEの実施要領を当該科目を履修している本学社会福祉学科2年生21名にアナウンス。実施日は8月1日。本年度の当該科目は2グループ(杉本, 桜井)で実施されており、各々のグループがアナウンスまでに面接技法の学習を終了しており、学生個人が十分に当該領域を復習できる時間が十分にあったと考える。7月4日のアナウンス時に、面接場面の説明(地域包括支援センターにおける5分間のインタビュー面接)と、利用者評価と評価者評価の用紙を配付。実施当日には杉本が評価者、桜井が利用者となりを実施した。なお、例年、面接の待ち時間には学習用のDVDを流していたが、本年は、教室等の関係によりこれを中止した。なお、OSCE[実施の翌週に、学生個人に評価者評価、利用者評価の結果を返還し、面接技法の復習と自己覚知を促した。

評価者評価(5段階)

1, クライアントを迎え入れる態度	言葉	5	4	3	2	1
	動作	5	4	3	2	1
2, 椅子の勧め方	仕種	5	4	3	2	1
	どちらが先に座るか	5	4	3	2	1
3, 対面位置のとり方		5	4	3	2	1
4, 初めの挨拶	言葉	5	4	3	2	1
5, 自己紹介	所属	5	4	3	2	1
	職名	5	4	3	2	1
	役割	5	4	3	2	1
6, 倫理的配慮	守秘義務の伝達	5	4	3	2	1
	メモを取ることの断り	5	4	3	2	1
7, 主訴の聞き取り	切り出し方	5	4	3	2	1
8, 質問方法の的確さ(開かれた質問・閉ざされた質問)		5	4	3	2	1
9, 身体技法	うなずき	5	4	3	2	1
	手や足を組んでいないか	5	4	3	2	1
10, 視線	相手の眼を見ているか	5	4	3	2	1
	きょろきょろしていないか	5	4	3	2	1
	相手の動きを追っているか	5	4	3	2	1
11, 声音の様子	明確さ	5	4	3	2	1
	速さ	5	4	3	2	1
	抑揚	5	4	3	2	1
12, 主訴の要約は的確であったか		5	4	3	2	1

利用者評価（5段階）

1, クライアントは気持ち良く迎えられたか	5	4	3	2	1
2, クライアントはワーカーの役割をよく理解できたか	5	4	3	2	1
3, クライアントは滑らかに相談関係に入れたか	5	4	3	2	1
4, クライアントは相談事を十分に聞かれたと感じられたか	5	4	3	2	1
5, クライアントは相談事を十分に話したと感じられたか	5	4	3	2	1
6, クライアントは相談事を十分に理解されたと感じられたか	5	4	3	2	1

得点の評価内容

- 5…非常によくできている
- 4…よくできている
- 3…できている
- 2…あまりできていない
- 1…全くできていない

3, 記述統計

評価者評価

記述統計量

	度数 統計量	範囲 統計量	最小値 統計量	最大値 統計量	平均値		標準偏差 統計量	分散 統計量
					統計量	標準誤差		
迎え入れる態度 言葉	20	2.00	3.00	5.00	4.1000	.20391	.91191	.832
迎え入れる態度 動作	20	2.00	3.00	5.00	4.1500	.19568	.87509	.766
椅子の勧め方 言葉	20	2.00	3.00	5.00	3.9000	.20391	.91191	.832
椅子の勧め方 仕種	20	2.00	3.00	5.00	4.0500	.19835	.88704	.787
椅子の勧め方 どちらが先に座るか	20	4.00	1.00	5.00	4.3000	.30000	1.34164	1.800
対面位置のとり方	20	.00	5.00	5.00	5.0000	.00000	.00000	.000
初めの挨拶 言葉	20	3.00	2.00	5.00	4.6500	.18173	.81273	.661
自己紹介 所属	20	4.00	1.00	5.00	4.1500	.28354	1.26803	1.608
自己紹介 職名	20	4.00	1.00	5.00	4.1000	.28928	1.29371	1.674
自己紹介 役割	20	4.00	1.00	5.00	3.4500	.38027	1.70062	2.892
倫理的配慮 守秘義務の伝達	20	4.00	1.00	5.00	4.3500	.23255	1.03999	1.082
倫理的配慮 メモを取ることの断り	20	4.00	1.00	5.00	4.3500	.28354	1.26803	1.608
主訴の聞き取り 切り出し方	20	3.00	2.00	5.00	3.9000	.21643	.96791	.937
質問方法の的確さ	20	3.00	2.00	5.00	3.0500	.19835	.88704	.787
身体技法 傾聴の姿勢	20	3.00	2.00	5.00	4.3500	.22094	.98809	.976
身体技法 うなずき	20	2.00	3.00	5.00	4.5500	.16975	.75915	.576

身体技法 手や足を組んでいないか	20	3.00	2.00	5.00	4.4000	.19735	.88258	.779
視線 相手の眼を見ているか	20	2.00	3.00	5.00	4.4000	.19735	.88258	.779
視線 きょろきょろしていないか	20	3.00	2.00	5.00	4.2500	.21613	.96655	.934
視線 相手の動きを追っているか	20	3.00	2.00	5.00	4.5000	.19868	.88852	.789
声音の様子 明確さ	20	3.00	2.00	5.00	3.6000	.26557	1.18766	1.411
声音の様子 速さ	20	3.00	2.00	5.00	3.6000	.22243	.99472	.989
声音の様子 抑揚	20	3.00	2.00	5.00	3.2000	.26754	1.19649	1.432
主訴の要約は的確であったか	20	4.00	1.00	5.00	1.8000	.27720	1.23969	1.537
有効なケースの数 (リストごと)	20							

平均値の比較を見ると、全員が最高値の5.0000を獲得した項目は「対面位置のとり方」一つである。当該項目の前年度の平均値は4.8333、2023年度が4.5294であることから、この項目に対する学生の学習度は年々上がっていると考えられる。逆に、毎年、高いポイントを獲得している「手や足を組んでいないか」の今年度の平均値は4.4000、昨年度は4.5833、2023年度は4.8824であり、年々ポイントが下がっている。また、今年度の最小値は2.0000であることから、この項目に関しては、学生の面接時における意識が年々低下していると考えられる。2023年度まで、身体技法に関する項目は、例年、平均値は高いポイントを出していたが、昨年来、身体技法についてのポイントが低下しており、身体技法に関する意識が低下していることが年々、顕著になっている。平均値が4.5000以上の項目は、「対面位置のとり方」5.0000、「初めの挨拶 言葉」4.6500、「身体技法 うなずき」4.5500、「視線 相手の動きを追っているか」4.5000の4項目、2024年度が「対面位置のとり方」「身体技法 手や足を組んでいないか」「視線 相手の動きを追っているか」の3項目であった。2023年度が「対面位置のとり方」「身体技法 傾聴の姿勢」「身体技法 手や足を組んでいないか」「視線 相手に目を見ているか」「視線 きょろきょろしていないか」「視線 相手の動きを追っているか」「手や足を組んでいないか」の6項目であったことから考えても、その項目数が、年々減

少していることがわかる。平均値4.0000以上の項目は「迎え入れる態度 言葉」4.1000、「迎え入れる態度 動作」4.1500、「椅子の勧め方 仕種」4.0500、「椅子の勧め方 どちらが先に座るか」4.3000、『自己紹介 所属』4.1500、「自己紹介 職名」4.1000、「倫理的配慮 守秘義務の伝達」4.3500、「倫理的配慮 メモを取ることに断り」4.3500、「身体技法 傾聴の姿勢」4.3500、「身体技法 手や足を組んでいないか」4.4000、「視線 相手の眼を見ているか」4.4000、「視線 きょろきょろしていないか」4.2500の12項目、4.5000の4項目を合わせて16項目、昨年の9項目に比べて2倍近く増えてはいるが、2023年度が同じく16項目であったことを考えると、多少は持ち直しているともいえる。2021年度からのコロナ禍以降、その影響が懸念されていた「声音の様子」についての項目であるが、今年度は「声音の様子 明確さ」が3.8000（最大値5.0000、最小値2.0000）、「声音の様子 速さ」が3.6000（最大値5.0000、最小値2.0000）、「声音の様子 抑揚」が3.2000（最大値5.0000、最小値2.0000）であった。それぞれの高校の昨年度の結果が、「声音の様子 明確さ」が2.6667（最大値5.0000、最小値2.0000）、「声音の様子 速さ」が3.0833（最大値5.0000、最小値2.0000）、「声音の様子 抑揚」が2.4583（最大値5.0000、最小値1.0000）であったことを考えると、前年度よりも、声音に関する項目については、学生全体については、コロナ禍

に影響に関しては減少してきていると考える。「声音」の項目に関連して、具体的な言語的コミュニケーションとなる項目については、「迎え入れる態度 言葉」が、4.1000（最大値5.0000，最小値3.0000），「椅子の勧め方 言葉」が4.1000（最大値5.0000，最小値3.0000），「椅子の勧め方 言葉」が3.9000（最大値5.0000，最小値3.0000），「初めの挨拶 言葉」が4.6500（最大値5.0000，最小値2.0000），「自己紹介 所属」4.1500（最大値5.0000，最小値1.0000），「自己紹介 職名」が4.1000（最大値5.0000，最小値1.0000），「自己紹介 役割」が3.4500（最大値5.0000，最小値1.0000），「倫理的配慮 守秘義務の伝達」が4.3500（最大値5.0000，最小値1.0000），「倫理的配慮 メモを取ることの断り」が4.3500（最大値5.0000，最小値1.0000），「主訴の聞き取り 切り出し方」が3.90000（最大値5.0000，最小値2.0000），「質問方法の的確さ」が3.0500（最大値5.0000，最小値2.0000），「主訴の要約は的確であったか」が1.8000（最大値5.0000，最小値

1.0000），同項目の昨年度の結果は，「迎え入れる態度 言葉」3.9583（最大値5.0000，最小値2.0000），「椅子の勧め方 言葉」3.8833（最大値5.0000，最小値1.0000），「初めの挨拶 言葉」4.2917（最大値5.0000，最小値2.0000），「自己紹介 所属」3.7083（最大値5.0000，最小値1.0000），「自己紹介 職名」3.8333（最大値5.0000，最小値1.0000），「自己紹介 役割」3.2500（最大値5.0000，最小値1.0000），「倫理的配慮 守秘義務の伝達」3.2500（最大値5.0000，最小値1.0000），「倫理的配慮 メモを取ることの断り」3.2500（最大値5.0000，最小値1.0000），「主訴の聞き取り 切り出し方」3.50000（最大値5.0000，最小値2.0000），「質問方法の的確さ」2.9107（最大値5.0000，最小値1.0000），「主訴の要約は的確であったか」1.9167（最大値5.0000，最小値1.0000）となっており，全体的に平均値は上昇していることから，言語的技法に関しては，全体的に向上していると考えられる。

利用者評価

記述統計量

	度数 統計量	範囲 統計量	最小値 統計量	最大値 統計量	平均値		標準偏差 統計量	分散 統計量
					統計量	標準誤差		
気持ちよく迎えられたか	20	2.00	3.00	5.00	4.6500	.13129	.58714	.345
ワーカーの役割をよく理解できたか	20	2.00	3.00	5.00	4.3000	.17918	.80131	.642
滑らかに相談関係に入れたか	20	2.00	3.00	5.00	4.3000	.17918	.80131	.642
相談事を十分に聞かれたと感じられたか	20	4.00	1.00	5.00	3.5500	.24575	1.09904	1.208
相談事を十分に話したと感じられたか	20	4.00	1.00	5.00	3.6500	.23255	1.03999	1.082
相談事を十分に理解されたと感じられたか	20	4.00	1.00	5.00	3.7000	.27242	1.21828	1.484
有効なケースの数（リストごと）	20							

利用者評価については，昨年度よりも得点上の向上が見られた。「気持ちよく迎えられたか」4.6500（最大値5.0000，最小値3.0000），昨年度

4.7917（最大値5.0000，最小値2.0000），「ワーカーの役割をよく理解できたか」4.30000（最大値5.0000，最小値3.0000）昨年度1.9583（最大値

2.0000, 最小値 1.0000), 「滑らかに相談関係に入れたか」 4.3000 (最大値 5.0000, 最小値 3.0000), 昨年度 3.4167 (最大値 5.0000, 最小値 2.0000), 「相談事を十分に聞かれたと感じられたか」 3.5500 (最大値 5.0000, 最小値 1.0000), 昨年度 3.0417 (最大値 5.0000, 最小値 1.0000), 「相談事を十分に話したと感じられたか」 3.6500 (最大値 5.0000, 最小値 1.0000), 昨年度 3.1667 (最大値 5.0000, 最小値 1.0000), 「相談事を十分に理解されたと感じられたか」 3.7000 (最大値 5.0000, 最小値 1.0000), 昨年度 3.0853 (最大値 5.0000, 最小値 2.0000), 「気持ちよく迎えられたか」の項目が昨年度に比べて微減しているが, 最大値と最小値の間隔は狭くなっており, 昨年度に比べて, 平均点周辺に集中していることがわかる。他の項目, 特に「ワーカーの役割をよく理解できたか」平均点で 2.4 ポイント以上上昇しており, また, 昨年度の最大値が 2.0000, 最小値が 1.0000, 今年度の最大値が 5.0000, 最小値が 3.0000 と, 今年度は高得点が集中していることがわかる。残りの項目も, 平均点は全て今年度の方が上昇しており, 評価者評価の結果から考察すると, 「声音」の項目と, 言語的コミュニケーションの項目の高得点化と相関していると考えられる。

4, 因子分析

今年度の OSCE における因子分析では, すべての項目間での因子の抽出はできなかった。ゆえに, 平均点が高く, また, 文選が小さい項目, 「対面位置のとり方」「初めの挨拶 言葉」「倫理的配慮 守秘義務の伝達」「身体技法 傾聴の姿勢」「身体技法 うなずき」「身体技法 手や足を組んでいないか」「視線 相手の眼を見ているか」視線相手の動きを追っているか」を除いた 16 項目において, 因子分析を実施した。分析手法は主因子法 (バリマックス回転) を用いた。

表 1 の「Kaiser-Meyar-Olkin の標本妥当性の制度」は 0.537 と, 0.500 以上であることから, 因子分析実施の意味があると判断した。表 2 の共通項

表 1 KMO および Bartlett の検定

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度	.537	
Bartlett の球面性検定	近似カイ 2 乗	272.106
	自由度	120
	有意確率	.000

表 2 共通性

	初期	因子抽出後
迎え入れる態度 言葉	.966	.894
迎え入れる態度 動作	.960	.889
椅子の勧め方 言葉	.884	.913
椅子の勧め方 仕種	.943	.918
椅子の勧め方 どちらが先に座るか	.867	.496
自己紹介 所属	.968	.917
自己紹介 職名	.969	.919
自己紹介 役割	.923	.763
倫理的配慮 メモを取ることの断り	.923	.952
主訴の聞き取り 切り出し方	.864	.783
質問方法の的確さ	.733	.656
視線 きよろきよろしていないか	.878	.582
声音の様子 明確さ	.971	.875
声音の様子 速さ	.939	.857
声音の様子 抑揚	.979	.940
主訴の要約は的確であったか	.500	.633

因子抽出法: 主因子法

目の因子抽出後の数値により, 今回分析した 16 項目が, 全て因子分析に参与すると判断した。表 3 により, 第 1 因子は「声音の様子 抑揚」「声音の様子 速さ」「声音の様子 明確さ」「主訴の聞き取り 切り出し方」「質問方法の的確さ」「自己紹介 役割」, 第 2 因子は「迎え入れる態度 言葉」「迎え入れる態度 動作」「椅子の勧め方 仕種」「椅子の勧め方 言葉」, 第 3 因子は「自己紹介 職名」「自己紹介 所属」「椅子の勧め方 どちらが先に座るか」, 第 4 因子は「倫理的配慮 メモを取ることの断り」「視線 きよろきよろしていないか」, 第 4 因子は「主訴の要約は的確であったか」となった。

表3 回転後の因子行列^a

	因子				
	1	2	3	4	5
声音の様子 抑揚	.958	.089	.060	.051	.090
声音の様子 速さ	.874	.115	.172	.216	.065
声音の様子 明確さ	.869	.018	.267	.211	-.056
主訴の聞き取り 切り出し方	.733	.323	.309	.094	.191
質問方法の的確さ	.628	.049	.114	.267	.418
自己紹介 役割	.531	-.074	.515	.348	-.299
迎え入れる態度 言葉	.184	.893	.074	.235	.048
迎え入れる態度 動作	.047	.846	-.095	.400	.044
椅子の勧め方 仕種	.011	.776	.457	-.305	-.119
椅子の勧め方 言葉	.269	.680	.410	-.300	-.345
自己紹介 職名	.258	.109	.906	.096	.097
自己紹介 所属	.396	.211	.795	.158	.241
椅子の勧め方 どちらが先に座るか	.024	.460	.486	.214	.051
倫理的配慮 メモを取ることに断り	.301	.314	.366	.792	.025
視線 きよろきよろしていないか	.259	.067	.068	.710	.039
主訴の要約は的確であったか	.150	-.055	.121	.004	.770

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法^a

a. 14 回の反復で回転が収束しました。

因子の解釈

第1因子

「声音の様子 抑揚」「声音の様子 速さ」「声音の様子 抑揚」「主訴の聞き取り 切り出し方」「質問方法の的確さ」「自己昇華 役割」



面接時における

言語的コミュニケーションの具体的技法

第2因子

「迎え入れる態度 言葉」「迎え入れる態度 動作」「椅子に置勧め方 仕種」「椅子に勧め方 言葉」



面接開始前のアイスブレイクのための基本的技法

第3因子

「自己紹介 職名」「自己紹介 所属」「椅子の勧め方 どちらが先に座るか」



面接開始時の信頼関係形成のための基本的技法

第4因子

「倫理的配慮 メモを取ることに断り」「視線 きよろきよろしていないか」



面接開始後の非言語的技法

第5因子

「主訴の要約は的確であったか」 → 主訴の要約は的確であったか

第1因子は「声音の様子 抑揚」「声音の様子 速さ」「声音の様子 明確さ」「主訴の要約 切り出し方」「質問方法の的確さ」「自己紹介 役割」と、すべて言語的コミュニケーションにかかわる重要事項と、具体的な質問方法に関する項目であることから、面接時における言語的コミュニケーションの具体的技法、とした。第2因子は「迎え入れる態度 言葉」「迎え入れる態度 動作」「椅子の勧め方 仕種」「椅子の勧め方 言葉」と、すべて面接開始前におけるクライアントとのファーストアプローチにおける項目であることから、面

面接開始前のアイスブレイクのための基本的技法、とした。第3因子は「自己紹介 職名」「自己紹介 所属」「椅子の勧め方 どちらが先に座るか」と、面接開始時の基本的な言語、非言語による基本的技法である項目であることから、面接開始時の信頼関係形成のための基本的技法、とした。第4因子は「倫理的配慮 メモを取ることに断り」「視線 きよろきよろしていないか」と、面接開始後の、メモの記載、視線という、非言語的技法に換算している項目であることから、面接開始後の非言語的技法、とした。第5因子は「主訴の要約は的確であったか」の1項目であったことから、項目名を、そのまま因子名とした。

5. 分析と考察

昨年度は、分散が最も小さい「手や足を組んでいないか」を除いた23項目に関連があり、「面接時におけるノンバーバル技法」「面接開始時の配慮」「面接開始に至るまでのアイスブレイク技法」「面接中核技法における言語的技法」「対面位置のとり方」の5因子が抽出された。今年度は、主に身体技法に関する項目との関連が見いだせなかったために、16項目による因子分析を行ったが、それにより、「面接時における言語的コミュニケーションの具体的技法」「面接開始前のアイスブレイクのための基本的技法」「面接開始時の信頼関係形成のための基本的技法」「面接開始後の非言語的技法」「主訴の要約は的確であったか」の5因子が抽出された。昨年同様、面接開始前から終了までの一連の過程を通しての因子抽出となったが、昨年度に比べて、より具体的な面接技法に関する因子抽出となった。特に、第1因子に「面接時における言語的コミュニケーションの具体的技法」が抽出されたことは、記述統計における、言語的コミュニケーションに関する項目の平均値が、昨年にも比べても高い値を記録していることから、学生間において言語的コミュニケーションについての意識が昨年度よりも高まっているものと考えられる。他方、身体的技法との関連が見い

だせなかったことから、面接に対する意識が言語的技法に偏っていることが伺え、非言語的技法を加えた。総合的な面接技法の獲得が課題として残された。これは、昨年度の第4因子が「面接中核技法における言語的技法」が抽出されているのに対し、今年度は、「面接開始後の非言語的技法」が抽出されたことから、その傾向が見て取れる。これは、繰り返しになるが、学生間において。昨年度まで懸念されていた新型コロナ禍による、言語的コミュニケーションへの過剰な配慮が、薄れてきたこととも関連していると考えるのが第一であろう。これは、記述統計の分析における「声音の様子」に関する項目が、昨年度より高い平均値を獲得していることからもうかがえる。また、環境面からも、現2年生が入学した昨年度は、すでに、学内において、マスク、シールドなどの、言語的コミュニケーションにおける距離感等の配慮がなくなっていることも影響しているものと考えられる。半面、身体的技法との関連が見いだせなかったことから、構造化された面接が、言語・非言語双方のコミュニケーションの相乗によってなりたつという原則についての理解が、まだ不足していると考えられる。

記述統計の分析でも触れたが、身体技法に対する項目は、昨年よりは多少持ち直してはいるが、年々、低下していることは否めない。これについては昨年度、本学の最新カリキュラムの科目配置が、その原因の異端ではないか、という仮説を立てたが、今年度の結果においても、言語的技法の項目の高得点を差し引いても、学内カリキュラムにおける何らかの課題克服の仕組み構築の必要性が低下したとは言えない。2021年度までの分析では、本学のOSCEの課題は、身体技法と、面接中核技法との分れであったが、最新カリキュラム実施以降の、特に昨年度からの課題は言語的技法と非言語的技法との分離が顕著になってきている、と考える。カリキュラムの配慮以上に、これは、面接技法としてもさることながら、ソーシャルワーク実践現場における、あるいはそれを離れた日常生活における基本的マナーとも関連してくる課題であ

る。今後の重要な検討課題といえる。

6. 実習教育に関する新たな課題について

以上の分析結果を考慮したうえで、今年度の2年次における学習課題は、言語的コミュニケーションの技法と動作技法の合一がまず挙げられる。これは、構造化された面接における、総合的なコミュニケーション技法の向上、ともいえるが、これは、構造化された面接もさることながら、生活場面面接においても重要な要因であり、言語と動作の不一致によるダブルバインドによる信頼関係構築への悪影響を払拭することにもつながると考える。2021年度からの現行カリキュラムにおけるテキスト内容には、事例の検討がメインに構成されており、OSCEのようなロールプレイングによる身体技法、コミュニケーション技法の学習が旧カリキュラムに比べて軽視されているように考える。これは、前述した、本学のカリキュラムの変更におけるモチベーションの低下とともに、言語的・非言語的コミュニケーションの合一という、あらたな下句集課題を提示している。ゆえに、本学2年次においては言語的・非言語的コミュニケーションの合一を意図した、実践的な学習プログラムの構成が課題となる。また、これは3年時の現場実習の事前学習への継続課題、特に、生活施設への実習においては克服すべき必須課題であり、実習中においても、利用者とのかかわりを振り返ることにより、常に考慮し、自己覚知につながるべき課題であると考えられる。

実習前評価システムは、現場実習を履修する学生の学習成果の担保を保障するという機能のもとに、2009年より北海道ブロック（当時は日本社会福祉士養成校協会北海道ブロック）により試行され、2011年から道内全養成校が施行することを義務付けられた。しかしながら、その実施方法は各養成校によって統一されてはおらず、各養成校の実情に合わせて実施されていた。本来の現場実習履修のための関門としての機能から、本学のように、学習成果の確認という機能の元に実施する養

成校など、その実施方法にはある程度の自由度が保障されていたが、各機能には共通して「学習達成度の確認」という要因が含まれていた。近年、各養成校において、学生数の総体的現象の影響からか、上記、学習課題達成度の確認と関係した、さらに基本的な社会生活的マナーの獲得ともいえる課題達成度が求められている。2024年、北海道ブロック開催の北海道社会教育セミナーにおいては、社会福祉士、精神保健福祉士実習における、実習現場からの課題が報告・検討された²。また、毎年開催されている精神保健福祉士、社会福祉士実習に関する研修会においても、同様なテーマにおける、講演、報告がなされた³。これらの動向が意味するところは、2024年度の北海道内の社会福祉士養成校において、共通の課題、つまりは、ソーシャルワーク現場実習において、学習した知識以前に、実習現場における、一社会人としてのマナーと、実習生としての基本的知識・スキルが、各養成校の学生において特に求められている、という、実習現場の現状である。つまりは、実習生の選抜という、OSCEなどの実習前評価システムの持つ本来の機能と同様に、あるいはそれ以上に、実習現場における上記したような、社会人としての基本的なマナーと、実習生としての基本的なコミュニケーション技法、記録技法の修得という機能の重要性が増してきている、ということである。今回の本学のOSCEの結果からいえば、「声音」の項目と、コミュニケーション技法の関連が双方ともに、高い平均点と、その関連が見られたが、コミュニケーションとは、言語・非言語的技法との相乗によりなされる、という原則から考えれば、身体的技法の項目の平均点の横ばい状況と、他の項目との関連が見られなかったことから、これらは、面接技法以前に、日常生活におけるコミュニケーション技法についても課題を残すと考える。これらの課題の克服が、今後の社会福祉士養成校の課題となるなら、実習前評価システムを実施・分析し、課題を抽出することの重要性は、今後、一掃に高まると考える。

註記)

- 1, 『実習前評価システムに関する一つの考察Ⅸ』 杉本大輔, 櫻井美帆子, 大島康雄, 星槎道都大学紀要第6号, P54
- 2, 2024年度北海道社会福祉教育セミナー「ソーシャルワーク実習の実施状況と今後の課題～実習指導者からみた養成校の取り組みと実習実施状況をもとに～」2024年12月15日13:00～17:00 開催方法: ZOOM 説明: 「北海道ブロックにおけるSW実習の質保証・向上を狙意図した取り組み内容」ソ教連北海道ブロック会長畑亮輔(北星学園大学), ソ教連北海道ブロック副会長松浦智和(日本医療大学)
報告「実習異説・機関の実習指導者から見た道内におけるソーシャルワーク実習」
・社会福祉士のソーシャルワーク実習の受入施設・機関の実習指導者
報告者: 橋本恭尚(真栄病院) 深瀬絵里(札幌市厚別区第2地域包括支援センター)
北村満広(地域生活支援センターのぞみ)
・精神保健福祉士のソーシャルワーク実習の受入施設・機関の実習指導者
報告者: 川崎康代(さっぽろ香雪病院) 大坪卓史(市立釧路総合病院)

グループディスカッション「ソーシャルワーク専門職たる社会福祉士・精神保健福祉士を要しえしていくために必要な取り組みや考え方」

- 3, 2024年度精神保健福祉士実習フォローアップ研修 2025年3月8日(土)13:00～15:40 於: 北星学園大学(ZOOM配信も同時実施)
講演1「高等教育機関における合理的配慮」真名瀬陽平(名寄市立大学保健福祉学部)
講演2「心理教育・実習等における合理的配慮の実際」斎藤美香「札幌学院大学心理学部」
2024年度ソーシャルワーク教育研修会 2025年3月22日(土)13:30～16:30 於: かでる2・7
基調講演「SW実習へのレディネス形成に向けたソーシャルワーク演習(縁あ集教育)のあり方」八木亜希子(名寄市立大学保健福祉学部)
実践報告「SW実習の実践と課題」

引用文献)

- ・杉本大輔 櫻井美帆子 大島康雄「実習前評価システムに関する一つの考察Ⅸ」星槎道都大学研究紀要第6号 47-58
- ・杉本大輔 櫻井美帆子 大島康雄「実習前評価システムに関する一つの考察Ⅷ」星槎道都大学研究紀要第5号 39-57

One Study Considered with the Estimational System for Social Work Practice X

SUGIMOTO Daisuke SAKURAI Mihoko UEHARA Masaki

Abstract

This paper reports on the results of this year's OSCE (Open System of Consultation Evaluation) conducted annually by the Faculty of Social Welfare at our university, as well as an analysis of the results and future challenges and prospects for social work practicum education.

